

高雄山神護寺は光仁帝の御宇和氣の清磨奏聞し建立有りしなり。初めは神願寺と号しぬ。淳和帝御宇天長二年に、空海に賜る。神護国祚真言寺とあらため号す。其頃詔を下して、金剛定寺の額を空海和尚に書しめんと勅使を立せ給ひける、をりふし五月雨して清瀧川の水増りて、高雄山のゆき、止りける。勅使則川のほとりにたゞずみ給ひ案じ煩ひ給ひけるを、空海しろしめして、筆に墨をふくませ、持たる額に向ふて書給ふに、墨霧のふる如く飛で、額の面に忽ち金剛定寺の四字現れける。「大師行狀記意をとる」額書石「石面に窪あり、硯石とす、樓門の外にあり」金堂の本尊薬師如来、講堂の五大尊ともに弘法大師の作なり。樓門の額は仁和寺覚信法親王の御筆。納涼坊には弘法の像を安ず、文覚上人の画像もあり。鐘樓は金堂の良にありて、鐘の銘は菅原是善卿、序の詞は橘広相、筆者は藤原敏行なり、是を世に三絶と号す、本朝の名器にして又ならぶものなし。八幡宮は経蔵の巽にあり、護法のやしろは和氣清磨の霊をまつるとなり。

此所はむかしより紅葉の名所にて、奥の地藏院より下なる溪をはるかに見おろし、立田の秋の色そひ、水にうつろふ紅に、峰の夕日かゞやき、あらしに見たるけしき錦をさらすなど詠みけんも思ひやられ、停車坐看楓林晚とは杜牧が詞なり。

都名所図会 大尾